

【試し読み用サンプル】

CLAW

ー クラウ ー

作・ ひきだ愛音(戯曲本舗)

■登場人物 (ヨミガナ)

主人公

鉤介 (コースケ)
青羽 (アオバ)
綿雪 (ワタユキ)

軍鴉連

鋭辰 (エイタツ)
唐丸 (トウマル)
小国 (シヨウコク)
蓑曳 (ミノヒキ)
白藤 (ハクトウ)

籠女

赤笹 (アカザサ)
白絹 (シラギヌ)

ワタリ連

ワタリ
ワタリ・紫
ワタリ・茶

職員

吉田
松本
田中原蔵

■舞台形状

規模は中型〜大型劇場。正面、上手、下手の三方を高い壁が覆い、観客に圧迫感や閉塞感を与える。

正面の壁には開帳式の大扉があり、両側の壁には上り下りできる階段がついている。壁の上の“へり”を歩くと渡り廊下が再現でき、壁の下と上で別々の場所をあらわすことができる。

吹き荒ぶ風の音と、どこかでかすかに鳥の羽ばたく音。

〈幕開け〉

夜が明ける。世界はまだ薄暗い青。

処。アズマジョウ、内庭にて。

舞台は中央、上手、下手の三方を灰色の巨大な塀で囲っており、見る者に閉塞感や圧迫感を感じさせる。

上手側から、群青色のタスキをかけた集団、下手側からは赤いタスキをした集団が、暗闇から浮かび上がる。全員、両手に脇差ほどの短い木刀を一本ずつ持っている。

両軍、神経を張り詰め睨み合っている。

赤組の先頭は鋭辰。その後ろに小国と養曳が控える。

全体的に赤組は群青組より年上のようなようである。

青羽

いざー！

それを合図に一斉に男たちが飛び出していく。戦闘開始。

〈二人一人の見せ場〉

鉤介＋青羽……（互いに競争意識を持ちながら、向かってくる赤組の男達を倒す）

唐丸＋綿雪……（唐丸が敵に倒されかけたところを綿雪が助ける）

鋭辰……(実力者であることがわかる、実践に慣れた殺陣。)

再び青羽、登場。赤組の誰かと睨みあっている。

と、そこへ鉤介が割り込んでくる。赤組を追い払う。

青羽 鉤介！何してるんだこんなところで。

鉤介 ご挨拶だな。助太刀してやったのに礼の一つもないのかよ。

青羽 何が助太刀だ。お前の持ち場はここじゃないだろう、作戦通りに動け。

鉤介 作戦？作戦ってのはお前が考えたあの頭でっかちなサクセンのことか？

青羽 頭でっかちで悪かったな。だが今お前は俺の指揮下にある。俺の指示通りに動いてもらわなきゃ困るんだよ。

鉤介 ああ困れ、困れ！お前の指図なんか聞く気はないんだよ、青羽班長殿。なに？

鉤介 俺は認めねえ。お前が俺の上に立つ？冗談じゃねえ！たかが一回の勝負に勝ったぐらいでいい気になりやがって、

青羽 当然の結果だろう。お前が負けたのは事実だ。

鉤介 あれは俺様の本当の実力じゃない！そう何度も鋭辰さんに再戦を訴えたのに――

青羽 聞く耳を持たなかったんだろ？聞いたさ。鋭辰さんの言う通りだよ。一度きりの機会をものにできなかった、それがお前の実力ってことだ。わかったら諦めて持ち場に戻れ。

鉤介 お前の命令は聞かねえ！今日俺はお前より多く赤組を倒して、名を上げる。そして俺が班長、いや、軍鶏連の隊長まで上り詰めてやる。軍の指揮も俺がとるんだ。

青羽 ほざけ。何をバカな、

鉤介 バカじゃねえ！それとも、俺とここでもう一度勝負するか？負けたら班長の座を降りろ。お前にわからせてやるよ、俺の本当の実力を。

青羽 ……しょうがねえなあ。じゃあさっさと一本取ってやるから、それで納得し

ろよ。

鉤介 またバカにしやがったな。行くぞ！

青羽 いざー！

鉤介、青羽に斬りかかる。青羽それをかわして斬りかかる。二人の戦闘はほぼ互角。が青羽が一瞬の隙をつき鉤介の後ろへ回り込み、刃を鉤介の喉元に突きつける。

青羽 何度やっても同じだ、鉤介！

鉤介 ナニクソ！

鉤介、青羽を突き飛ばす。二人睨み合い、同時に駆け出す。刃をかち合わせようとしたその時。何者かが飛び出し、二人の刃を自らの両刃で受け止める。

鉤介 お前、

綿雪 なにやってんだお前らは！（顔を上げる）

青羽・鉤介 綿雪！？

〈タイトルコール〉

暗転。中央の壁面に映像。

毛筆で殴り書きされたような字体でタイトル「BLAW」の文字。

続いて、次の言葉が表れる。

時、定かではない」

北関東の山間に、二棟の要塞在り。」

誰ぞ、東の一棟をアズマジヨウ、西のそれをニシノミヤと呼ぶ。」

灰一色の巨大な塀に取り囲まれた、味気ない佇まいである——」

続

【執筆当時を振り返って】

2000～2010年代、学生だった私は演劇集団キャラメルボックスの芝居が好きでした。現代風時代劇を見たのも彼らが最初。そして大学時代には劇団☆新感線の公演：タイトルは忘れましたが石川五右衛門が主役の：何かを観ました（笑）。殺陣がとにかくカッコ良くて、台詞回しにキレがあり、正義も悪も、色で言えば白と黒とグレー（？）がぐちやぐちやと入り乱れる、そんな芝居が書きたくて書いた初めての長編活劇です。（ちなみに、今確認したらテキスト部分だけで75ページありました；苦笑）